八女町家ねっと ＆ まちづくり団体

１．八女市、その市街地の歴史

八女市は福岡県の南部、福岡市から南へ約 50km に位置し、北は久留米市、広川町、西は筑後市、南は熊本県、東は大分県に接している。2000 年（H22）の近隣２町２村との合併後 482.53 平方ｋｍとなり、中南部は平野、北東部は森林で占められている。2012 年の集中豪雨では、特に山間部が大きな被害を受けた。そして、2018 年全面復興を果たした。

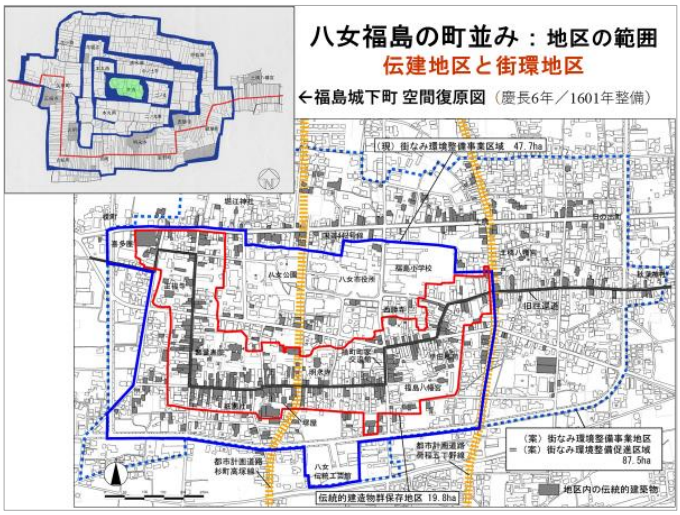
八女市の市街地・福島は天正 15 年(1587)に築かれた福島城を、慶長 5 年(1600)田中吉政が、支城として大修築し、城下町をつくった後、大きく栄えた。福島城は堀で囲まれ、城を迂回する往還道路に沿って「町人地」を配したが、元和 6 年(1620)に福廃城となり、以後、町人地は八女地方の交通の要衝の地として、また、経済の中心地として発展する。また和紙、ハゼ蝋、提灯、仏壇、石工品、茶など様々な特産品の開発やそれを素材とした工芸品の創作に取り組むと共に、積極的な商工業の振興による富の蓄積で重厚な商家が連続する町並みを形成していった。

明治後期には国道が整備され、国鉄（現 JR）羽犬塚駅から「馬車軌道」や久留米から「電気軌道」が通じ、土橋を中心として、その繁栄は戦後まで続いたが、昭和 40 年代以降には国道 3 号のバイパスの完成、九州自動車道八女インターの開設、国鉄（現 JR）矢部線の廃止、福島を四角に囲む環状線道路の完成などにより車中心のまちの骨格が形成されるとともに、町並みの近代化が始まった。

２．町並み保存の機運の高まりとまちづくり

市民が八女福島の町並みの価値に気づくきっかけとなったのは、1988 年（Ｓ63）に東京町(ひがしきょうまち)の「旧木下家住宅」（堺屋）が市に寄贈され、修理・復原された（公開は 1992 年（H4）ことに始まる。また、1991 年（H3）の大型台風によって被害を受けた伝統的町家が取り壊されて空き地になるなど、町並みが歯抜け状況になるのを見て危機感を感じた市民有志が、勉強会を重ね 1993 年（H5）にまちづくり活動を展開する市民団体「八女・本町筋を愛する会」を発足させ、「八女町屋まつり」が開催された。この影響で八女福島の町並みに市民や観光客の関心が向けられるようになった。さらに、1994 年（H6）にはまちづくり団体「八女ふるさと塾」が新たに発足し、八女福島の町並みを活かすまちづくり活動が、市民が主体的に実践する形で充実してきた。現在、地場産業でもある雛人形をアピールする「雛の里・八女ぼんぼりまつり」や「八女町屋まつり」など町並みを舞台としたイベントが、様々なまちづくり団体等により取り組まれ、定着してきている。

八女福島の町並み　　福島商人が活躍したまち



このような動きを背景に、1993 年度（H5）から市は、建築物等の修理・修景事業や住環境の整備を行うために、建設省（現国土交通省）の「街なみ環境整備事業」の導入を検討し、1995 年度（H7）から事業をスタートさせた。1997 年（H9）5 月には町並みの情報発信の拠点、そして市民の交流の場として造り酒屋跡を買収整備し「横町町家交流館」を開館した。事業導入に先立って、1994 年度（H6）には事業対象地区の住民によって「景観のまちづくり協定」が締結され、協定者の代表による「八女福島伝統的町並み協定運営委員会

（現：八女福島町並み保存会）」が組織された。1996～1997 年度（H8～9）には国の支援で保存対策調査を行い、2002 年（H14）5 月に国の「重要伝統的建造物群保存地区」(=重伝建地区、全国 61 番目）の選定を受けた。

●まちづくりの経緯●

- ●１９９１年（Ｈ３）
  - ・超大型台風　１７号・１９号により町家の被害甚大
- ●１９９３・１９９４年（Ｈ５・６）
  - ・まちづくり団体「八女・本町筋を愛する会」「八女ふるさと塾」発足
  - ・町並み保存を公約に掲げた若い市長が誕生
- ●１９９５年（Ｈ７）
  - ・「八女福島町並み保存会」発足（住民組織・12町内会）
  - ・「街なみ環境整備事業」で町家の修理・修景事業の開始
- ●１９９６・１９９７年（Ｈ８・９）
  - ・伝統的建造物群保存対策調査（2ヵ年）
- ●２０００年（Ｈ１２）
  - ・「NPO八女町並みデザイン研究会」発足（建築士・職人集団）
- ●２００２年（Ｈ１４）５月
  - ・八女福島の町並み「重要伝統的建造物群保存地区」＝伝建地区に選定
- ●２００３・２００４年（Ｈ１５・１６）
  - ・「NPO八女空き家再生スイッチ」、「NPO八女町家再生応援団」発足（空き家再生活用集団）
- ●２０１０年（Ｈ２２）：デザイン研究会と町家再生応援団の協働活動
  - ・日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産に第１号登録
- ●２０１１年（Ｈ２３）
  - ・「NPOまちづくりネット八女」発足（空き家再生活用集団）
- ●２０１３年（Ｈ２５）
  - ・「まちや紳士録」の製作（八女福島のまちづくりを記録し検証）
- ●２０１４年（Ｈ２６）
  - ・「第３６回サントリー地域文化賞」を受賞

３．八女町家ねっとの発足

町並みを保存する仕組みや官民の協力体制は整えられてきたが、しだいに町並みの中に少子高齢化や人口減少により空き家が目立つようになって、まちの衰退が顕著になっていた。

「八女町家ねっと」は、八女の町家を宝として磨き、町家の所有者と住宅や店舗として活用する担い手に繋ぐこと及び伝統的な建築技術を育成・継承すること目的に活動していた「ＮＰＯ法人まちづくりネット八女」(＝まちづくりネット)、「ＮＰＯ法人八女町家再生応援団」(＝町家再生応援団)、「ＮＰＯ法人八女空き家再生スイッチ」(＝空き家再生スイッチ)、「ＮＰＯ法人八女町並みデザイン研究会」(＝町並みデザイン研究会）の４団体を中心に連携を強化し、町並みに再び賑わいを取り戻すことを目標として 2011 年９月に協働のホームページ「http://yame-machiya.net/」の作成を契機に緩やかなネットワークとして 2012 年（H24）６月に発足した。

そして、この協働の取組みは、公社）日本ユネスコ協会連盟が 2009 年から取組んでいる「プロジェクト未来遺産」へ第１号として登録をいただいている「町家等の空き家の再生・活用と伝統構法の育成・継承を推進する活動」に更に磨きがかかっている。

また、これらの活動を記録し次の世代に継承するためにドキュメンタリー映画「まちや紳士録」を製作（2013 年８月完成以来、全国各地で上映会を取組み情報発信している。）して、全国の町並み保存・継承の課題を抱えている地域との情報交換及び連携強化を進めている。

４．各まちづくり団体の活動の内容

≪八女町家ねっとを構成する４団体の活動≫

●　八女福島のまちづくりの特徴　●

＊日本ユネスコ　・　プロジェクト未来遺産　2010登録＊

【まちづくり団体の連携・協働】

町家を修理する伝統建築技術の後継者の減少

少子高齢化
町家等の空き家の増加

【プロジェクトの目標】

伝統建築技術の伝承
≪八女町並みデザイン研究会≫

空き町家等の再生活用
≪八女町家再生応援団≫
≪八女空き家再生スイッチ≫
≪まちづくりネット八女≫

「八女福島遺産」　保存継承 → 暮らし・コミュニティの持続

１）まちづくりネット

団体名：ＮＰＯ法人 まちづくりネット八女
所在地：〒834-0031 八女市本町 264 西棟
連絡先：理事長・北島　力（きたじま　つとむ）
☎：090-8413-6128、E-mail：bynrt982@ybb.ne.jp
http://yame-machiya.net/
会員数：18 名　　年会費：3,000 円
設立年月：2011（H23）年８月

地域のコミュニティを担う外からの移住者をまちの「担い手」として、積極的に受入れるまちづくり活動について、行政の担当部署及び他のまちづくり団体との連携・協働を強めながら、空き家の所有者の住民及び移住希望者への相談活動を協働で取組んでいる。

≪旧土橋商店街の再生活用≫

直近の重点の取組みは、八女福島の商業地区に隣接して「旧土橋商店街の建築物群」(長屋の建物、土地の所有者と建物の所有者が異なり、建物所有者は、コマごとに多数おられる。中央が木造アーケードになっていて全国的にも貴重な建築である。）が残っていて、建物の老朽化が限界に達している。①「戦後Ｓ２５年に建築された当時の土橋商店街で、その時代をリードしてきた貴重な建物である。」②「伝建地区の東側の端に位置し、土橋

市場とつなぐ、また、町並みの賑わい創出の取組みに重要な資源である。」との基本的な考えから、将来に継承し伝えていくべき歴史的建築物群として再生活用を検討している。当面は、学術調査及び現況・実測調査並びに復原調査（図面等基本設計図書作成を含む）の検討を進めている。

２）町家再生応援団

団体名：ＮＰＯ法人 **八女町家再生応援団**
所在地：〒834-0031 福岡県八女市本町 264
連絡先： 代表・新開　一司（きたじま　つとむ）
☎：090-4036-9587、email： bynrt982@ybb.ne.jp
http://yame-machiya.net/
会員数：15 名　　年会費：5,000 円
設立年月：2003（H15）年 8 月

≪空き家の調査、マッチング活動≫

町並みの中の空き家を地域資源として位置づけ、随時調査し実態を把握、家主の意向調査等を行い、活用を図るように働きかける。また、町家を希望される「借り手」に空き家を紹介している。賃貸等の契約成立後は、借り手の地元の人との交流やコミュニティづくりをサポートしている。また、空き家の改修にあたっては、建築の技術・技能者の集団「町並みデザイン研究会」及び行政等から町家の修理等の技術的な指導を受けながら、町家の価値を損なわないような修理工事をサポートしている。

≪町家のメンテナンスの支援≫

町家の所有者の高齢化が進み、昔から定期的に行ってきたベンガラ柿渋塗り（防腐などのため）ができなくなってきたため、希望する家主さん（材料費を負担）に代わり、市民参加のワークショップ形式で建築士等の指導をうけ、ベンガラ柿渋塗りを行っている。

３）空き家再生スイッチ（2003 年（H15）発足）

≪旧八女郡役所の再生活用≫

１０年以上継続して取組んできたのが、旧八女郡役所の歴史的建築物（大規模）の再生活用である。2015 年に雨漏りの悪化で老朽化の限界と判断し、理事長を中心に若いリーダーのもと資金計画（銀行融資）を含めた事業計画を立て、情熱のある大工棟梁の協力を得ながら、土壁塗り、外壁塗装などはＤＩＹ手法でボランティアの協力を受けて、同年７月から最低限の修理事業を着工し約２年かけ、2017 年３月に地元の酒店が入居して一部がオープンした。2018 年３月から北の西側の部分に「Kitorasu」（きとらす、カフェ併設のえほん屋・ありが 10 匹の運営）が本格営業している。

大規模な建物のため、修理箇所も多く、使いながらＤＩＹでボランティアの協力を受けながら修理を継続している。

団体名：ＮＰＯ法人 **八女空き家再生スイッチ**
所在地：〒834-0031 八女市本町２番地 105
連絡先：理事長・高橋康太郎（たかはしこうたろう）
☎0943-23-0924　email：ktakaf5@gmail.com
http://gunyakusyo.com/
会員数：15 名　　年会費：2,000 円
設立年月：2003(H15)年 7 月

４）町並みデザイン研究会

≪伝統建築技術の継承≫

地元の建築士及び工務店等が八女福島の伝統様式や伝統構法の知恵を共有し継承していくために、日々、研鑽を積んでいる。具体的には、町家等の

修理・修景事業の現場を利用しての学習会や技術を高めるための講習会の開催、設計部会では痕跡調査・履歴調査などの学習会も行っている。

≪修理事業の相談業務及び設計監理と施工≫

町家等の修理・修景事業の地元住民向けの無料相談や完成後の見学会等も定期的に行い、修理・修景事業や歴史的建築物の維持の普及活動を継続的に行っている。そして、伝建事業、街環事業の補助事業として年に５～６棟の修理・修景事業があり、この事業の設計監理と施工を担っている。

団体名：ＮＰＯ法人 **八女町並みデザイン研究会**
所在地：〒834-0031 福岡県八女市本町 315
連絡先：副理事長・中島孝行（なかしま　たかゆき）
E-mail：naka-atelier-97@wind.ocn.ne.jp
☎0943-22-5804　　http://yame-machiya.net/
会員数：正会員 35 名　　年会費：6,000 円
設立年月日：2000（H12）年４月

４．連携・協働の取組みによる成果

≪空き家の再生活用、移住受入≫

空き家への移住者等の受入れはこれまで６０軒で、形態で店舗、店舗兼住宅、工房兼住宅、工房兼店舗、住宅など様々である。とくに、経営のため２階に住まって１階が店舗や工房のケースも結構多い。20 代後半～40 代までの年齢層が多く、ほとんどが市外からの移住者である。空き家が埋まり、魅力的な活用が増えたことで、来訪者も徐々に増え、また、人口減少の歯止めになりつつある。さらに、移住者の家族が地域の行事へ参加することにより、住民との良好なコミュニティの維持に貢献する形となっている。

≪伝統建築技術の継承、技能の向上≫

伝統構法を駆使した町家等の修理事業の継続的実施により、良好な町並み景観が徐々に蘇っている。また、左官職人は厳しい状況が続いているが、大工など職人の技能者の後継者は少しずつ増えてきている。町並みの歴史的建築物は、約 230 棟あり 1995 年の保存整備事業導入から現在まで、約 140 棟の事業の実績を上げている。また、八女市内もう一つの重伝建地区の黒木地区での技術・技能者との交流を進めている。

５．今後の課題と展望について

≪町家等空き家の再生・活用≫

町家の再生、活用は全国的な課題で、全国町並みゼミ（ＮＰＯ法人全国町並み保存連盟）や全国町家再生交流会で、他団体との情報交換等を強化する。そして、空き家の所有者による修理、活用が困難なケースが増えるのに対応すべく、所有者に代わり修理、活用を推進する代行リノベの仕組みを進化させていく。最終的には、修理、活用に持続的に回せる資金として、行政と協働でまちづくりファンド創設を目標として取組んでいく。

≪移住受入によるコミュニティの担い手づくり≫

八女福島のまちを好きになった移住者を積極的に受入れ、町家の継手及び新しい住まい手として継続的なサポートを行い、地域のコミュニティの担い手を多く育てることが重要と考えて取組んでいく。

≪大規模な歴史的建築物の再生・活用≫

地域を誇れる歴史、大切な記憶である旧八女郡役所、旧土橋商店街等の歴史的建築物を来訪者と住民の交流の拠点として、また、魅力ある空間として再生・活用を行うことを目標に取組んでいく。

≪町家の修理等の技能の向上・継承≫

伝統構法の技術を次代に継承する仕組みづくり

や職人の育成が急務で、重伝建地区にとどまらず、地域に存在する多くの歴史的建築物の保存再生をも考慮した活動も展開したいと考えている。これらは全国的に深刻な問題で、「作事組全国協議会」（伝統構法の技術・技能者の集団としての全国組織、2009 年設立、京都の京町家作事組が事務局）を中心に、全国的な連携を推進しつつ、歴史的建築物の修理・利活用の推進のため、建築基準法をはじめとした法制度の改正の運動を持続的に強化する。また、技術・技能者の仕事を確保するため、伝統技術と共に地場産材を使った一般住宅の普及を目標として行政と協働で取組んでいく。

ドキュメンタリー映画　「まちや紳士録」紹介
－１時間２８分（８８分）の長編－

―毎年９月に３日間公演公開される・八女福島の燈籠人形―

●ドキュメンタリー映画製作の具体的活動と意義

この映画製作のきっかけは、2011 年９月に八女福島の燈籠人形（からくり人形）公演の見学した映画会社のプロデューサーが、見学後に地元の人と町家で地酒を酌み交わし、八女福島の町並みの保存継承活動に触れたことに始まり、映画監督が八女福島の町家暮らしを始めたことで、構想が大きく膨らんだ。

私たちは、先人の知恵と努力の中で育まれてきた日本の伝統文化として、世界に誇るべき歴史的町並みを後世に伝え残していくため、少子高齢化の深刻化による町家の担い手不足、社会構造の激変に伴う建築文化の変化の中で大工や左官などの職人の減少による伝統的建築技術の担い手不足など、厳しい現実に直面している。

八女福島では、これらの課題に先駆的に取組むため、空き家の再生活用及び伝統建築技術の伝承を重点として、町並みの保存・継承活動を展開している。その活動を全国に伝えるために、まちづくり団体のリーダー及び住民、移住者及び移住希望者、そして建築士、大工等の職人に取材し、修理現場を含め撮影を行い、ドキュメンタリー映画を製作した。

高度成長時代にスクラップアンドビルドという価値観のもと、日本の原風景である多くの町並みが破壊された。経済の論理、開発の波から取り残された町並みは、バブルがはじけて低成長時代が続く今、輝きを取り戻そうとしている。それはなぜか、そこには日本人の伝統文化を大切にする心があるからです。「古民家を修理して住む、古材を利用する、家を代々つないでいく」、「暮らしをつないでいく、命をつないでいく、伝統をつないでいく」日本の「木の文化」は、暮らし、命、心とともに家（町家）を繋いできました。この映画は、繁栄のかなで忘れかけている日本の心の本質を問いかけている。

2013 年８月に完成したこの映画は、福岡、東京、京都、大阪、名古屋、神戸、佐賀、北九州、鹿児島、金沢、新潟等の映画館で公開され、全国で日本固有の町家や民家建築等を修理し未来に繋げていく活動を展開している地域を中心に 45 箇所を越える地域で上映会が取組まれ、大きな反響を呼んでいる。

●製作の期間及び団体の事務局、ＤＶＤの購入

◎映画の製作：　2012.06.22～2013.08.10
◎八女町家ねっと／　事務局　北島　力
◎問合せ先：☎ 090-8413-6128、FAX 0943-24-8521
〒834-0031 福岡県八女市本町 264　西棟
E-mail　bynrt982@ybb.ne.jp
ＨＰ　http://www.yame-machiya.info

―DVD 購入申込は、
（@3700、Ｅメール、FAX で）―

●製作スタッフ

◎プロデューサー：　川井田博幸
（株式会社・グループ現代）
◎監　　督：　伊藤有紀
◎撮　　影：　尾登憲治、伊藤有紀
◎音　　楽：　原みどり

―作成：　2018.04.01　北島　力／八女町家ねっと事務局長、八女福島町並み保存会事務局長、ＮＰＯ法人まちづくりネット八女理事長―